

小学校全学年に対する薬育デザインの検討

○高橋 利奈¹, 岸本 桂子¹, 関 将輝¹, 清水 靖子², 福島 紀子¹(¹慶應大薬,²国分寺市学校薬剤師会)

【目的】現在、小学校において薬育は義務化されていない。小学生への薬育は広まりつつあるが、段階的に1~6年生までの授業内容を示しているものは見受けられない。本講座では、2010年度、三宅らにより小学校1、2、3~4、5~6年生に対する発達段階別薬育の導入1回目が行われている。本研究では薬育1回目の効果を検討し、薬育2回目を実施することにより、小学校での発達段階別薬育デザインの構築を目指す。

【方法】都内の小学校1校の全校児童を対象とし、薬に関する誤認識の有無等について薬育前後に自記式質問紙法にて調査した。薬育1回目の効果の継続性は2、4~6年生において検討した。薬育2回目は1~6年生までそれぞれに発達段階別にデザインし、各1コマ、計6回実施し、2~6年生における薬育2回目の効果を調査した。データ解析には χ^2 独立性の検定、Fisherの正確確率検定を用い、有意水準を5%として統計処理を行った。

【結果・考察】2011年度2年生では、薬育前調査において、2010年度の薬育前調査に比べて、誤認識をしている児童の割合は減少していた($P<0.05$)。しかし、2010年度の薬育直後調査と比べると増加する項目がみられた($P<0.05$)。薬育1回目の効果の継続性はみられたが、月日が経つことで誤認識に戻ってしまう児童が存在するため、繰り返し薬育を実施する必要性が示唆された。薬育2回目の評価では、2011年度に新しく追加した内容に関して、3~6年生で、薬育前に比べ誤認識をしている割合が減少した。今回1~6年生まで6段階で構築した発達段階別薬育デザインは全学年において理解可能な内容であったといえる。効果の継続性については来年度検証予定である。